

島根県立大学における入学前日本語教育

—「島根県立大学交流県留学生日本語研修2003」の報告と評価—

犬 塚 優 司
佐 藤 り え こ

はじめに

1. 本研修の教育計画
 - (1) これまでの状況
 - (2) 研修計画の作成
 - (3) 受講生とその日本語学習歴
 - (4) 研修において開設する科目
 - (5) 使用テキスト
 - (6) スケジュール
 - (7) 教室
 - (8) 担当講師間の連絡調整
2. アカデミックジャパニーズ
 - (1) アカデミックジャパニーズとは
 - (2) 授業計画—研修科目としてのアカデミックジャパニーズ
 - (3) 授業報告
 - (4) 授業の評価
 - (5) 授業の課題
3. アカデミックジャパニーズ以外の授業の概要
4. 本研修の評価
 - (1) 評価のための資料
 - (2) 各授業科目の評価
 - (3) 本研修全体の評価

おわりに

はじめに

本稿の目的は、2003年2月12日から3月26日まで島根県立大学¹⁾で実施された「島根県立大学交流県留学生日本語研修2003」²⁾について、その概要を明らかにし、研修実施後の評価を示すものである。

本研修のような大学・高等専門学校入学志望者への日本語教育について、植松（1991）は「予備教育」と呼び、その特徴、目標、内容に関して、詳しい検討を進めている。奥田

(1991)は、大学における予備教育の現状を示し、問題点を指摘している。また、本研修の計画においては、コースデザインの研究を進める田中（1988）、田中（1989）を参考とした。本研修の受講生のような日本語中・上級者に対する指導については、北條（1989）、国立国語研究所（1997）に詳しく論じられている。

本稿は、1）本研修の計画、2）研修の中核をなす「アカデミックジャパニーズ」の計画、実施概要及び評価、3）研修実施後の評価の大きく三つの部分から構成されている。1）、3）及びアカデミックジャパニーズ以外の授業の概要については、主に犬塚が担当し、2）については主に佐藤が担当した。

1. 本研修の教育計画

(1) これまでの状況

本学では、開学した2000年4月より、島根県と交流協定を結んでいる中華人民共和国吉林省及び大韓民国慶尚北道からの留学生を受け入れている。また、2002年4月より中華人民共和国寧夏回族自治区からの留学生³⁾を受け入れている。交流県留学生の受け入れに関して、交流県留学生は出身国で日本語を習得し、本学に入学することになっている⁴⁾。

しかし、2000年度入学の交流県留学生の入学時の日本語能力は、本学の授業を十分に理解するレベルに達してはいなかった。このため、5月から7月まではボランティアの教員及び教員の家族により日本語指導が行われた。夏季休暇期間中の9月には4週間日本語と日本事情の授業が実施された。また、秋学期からは学外の日本語講師とボランティア講師により留学生日本語の授業が実施された⁵⁾。

2000年度入学の交流県留学生の状況に鑑み、2001年度入学の交流県留学生に対しては入学前年度の1月に来日させ、入学前の研修を11週間実施した。この研修は、財団法人しまね国際センターに教育計画の作成及び実施を依頼し、松江市のしまね国際研修館にて実施された⁶⁾。2002年度入学の交流県留学生に対しては、学外の日本語講師松田みゆき氏の作成した教育計画をもとに、2月12日から6週間、本学が実施した⁷⁾。

このため、実施主体、大学内の指導体制等が不明確なものとなる、学生の管理・監督が不十分なものとなる、学生にとっても、松江市から浜田市への移動により、研修終了後浜田での生活に再び順応するための負担を強いることになる、などの問題が指摘されていた。

入学前研修といえども、本学の教育の一環であり、本学が計画を策定し、本学において実施すべきである。もちろん、指導者、施設などの解決すべき問題もあり、そのために学内では留学生支援検討委員会⁸⁾が設置され、交流県留学生に対する日本語教育などの問題についての大枠が検討された。また、関係する教員と事務局企画課及び教務課の職員が具体的な事項について検討を進めた。その結果、2003年度入学の交流県留学生に対する入学前研修である本研修について、本学で実施することとなった。これにより、実施主体、指導体制が明確なものとなり、学生にとっても、来日後、居住地の移動がなくなり、負担を軽減することができた。

(2) 研修計画の作成

本研修が本学で実施される以上、本学教員が研修全体の研修計画を作成すべきである。教育面については、本学には専門的な知識を必要とする日本語教育に精通した教員がいないため、福山大学非常勤講師佐藤りえこ氏が、本学の犬塚優司講師と共同で研修計画を作

成した。生活面については、江口真理子助教授、犬塚優司講師と教務課学生係が指導計画を作成した。

なお、本稿においては、紙幅の都合により、教育面の指導計画についてのみ、取り扱う。

1) 研修の目的

本研修は、交流県留学生在が本学に入学後円滑に学修、研究を進めていくことができるようにすることを目的とする。

2) 達成すべき能力・知識

研修の目的を達成するためには、入学前の交流県留学生在に次の四項の能力・知識を習得させなければならない。

- ①日本での生活に必要な日本語能力
- ②大学の授業を履修するために必要な日本語能力
- ③日本の文化、社会に関する一般的な常識
- ④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識

ただし、①については、出身国で習得されていることが期待される。

受講生が4月に入学するのは、島根県立大学総合政策学部⁹⁾である。本学部の「教育課程の中核をなす」基幹科目においては、「社会科学を構成する基礎的な理論と現代社会の特徴である多様性、相対性の認識に立脚して、諸科学を総合する政策原理及び各種政策理論における具体的な政策手法を学習していく」¹⁰⁾ことになっている。このように、本学部は社会科学を中心に学んでいく学部である。したがって、受講生は③、④を身につけておくことが是非とも必要となっている。

3) 生活面、交流活動への配慮

学修、研究の前提として、日本での生活に順応することが、重要である。そのために、授業の展開においても、受講生の生活について、十分配慮しなければならない。また、日本での生活を豊かにするためには、受講生の周囲の人々との交流を深めていく必要がある。そのため、交流を促すような授業内容を取り込む必要がある¹¹⁾。

(3) 受講生とその日本語学習歴

本研修を受講する交流県留学生的の日本語能力は次の通りである。

	性別	出身国	日本語学習状況	期間	総学習時間
A	女	中華人民共和国	中学校、高等学校 ¹²⁾ の授業	6年	1,400時間
B	女	中華人民共和国	中学校、高等学校 ¹²⁾ の授業	6年	960時間
C	女	中華人民共和国	大学専科 ¹³⁾ の授業	3年	3,000時間
D	男	大韓民国	高等学校、大学のサークル活動	4年	600時間
E	男	大韓民国	高等学校の授業(1年)、独学	4年	400時間

各学習者の日本語学習歴は、大きく異なっている。A、B、Cは、既に中級修了以上の学習歴を持ち、日本語能力試験一級の認定基準で想定されている「日本語を900時間程度学習したレベル」¹⁴⁾に達している。一方、D、Eは、ほぼ初級を修了したレベル¹⁵⁾であると言いうことができるだろう。

(4) 研修において開設する科目

本研修で何を教えるかという問題は重要である。田中（1989）が、「何を教えるかを決定するとき、その最も基本的な要因となるものとは、学習者にとって、どのような日本語が必要となるかということである。」（p.94）と言っている通り、本研修の受講生が必要とする日本語を考えていかなければならない。

本研修においては、上記の②～④項の能力・知識を習得できるよう、次の通り、授業科目を設定した。

1. アカデミックジャパニーズ
2. 基礎日本語補充（漢字の習得を含む）
3. 社会科学基礎知識
4. 日本事情・島根研究
5. 大学授業実践講座

1. アカデミックジャパニーズは、②大学の授業を履修するために必要な日本語能力を習得させることを目的とする。本研修の中核となる科目である。

2. 基礎日本語補充は、①日本での生活に必要な日本語能力の拡充を目的とする。この能力は出身国での習得が期待されているが、これまでの留学生の状況から見て、日本での生活実践に密着した言語能力を更に高める必要があると考えられる。また、韓国人の受講生については、特に漢字の知識が十分ではなく、一定時間の補充授業が必要であると考えられる¹⁶⁾。

3. 社会科学基礎知識は、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識を習得させることを目的とする。本学総合政策学部の学修・研究においては、基礎的な社会科学の知識とその体系化が前提であるため、社会科学に関する基礎的な知識を一定の水準に引き上げる必要がある。具体的には、高等学校における「現代社会」の政治、経済に関する部分程度の知識が必要であると考えられる。

4. 日本事情・島根研究は、③日本の文化、社会に関する一般的な常識の習得を目的とする。日本の文化、社会に関する知識を中心とするが、あわせて島根県に関する文化、社会についての知識の充実を目指す。そのため、実地の活動や参観活動を積極的に行う。

5. 大学授業実践講座は、入学後の橋渡しとすることを目的として、実際に大学の授業を体験させる。

各科目の一週あたりの配当時間数などについては、次の通り予定した。

科目	配当時間数	担当講師
1. アカデミックジャパニーズ	16または20	佐藤りえこ（学外講師）
2. 基礎日本語補充（会話）	4	堀越由美（学外講師） ¹⁷⁾
基礎日本語補充（漢字の習得）	4	竹本喜代子（学外講師） ¹⁸⁾
3. 社会科学基礎知識	4	橋ヶ迫劭（学外講師） ¹⁹⁾
4. 日本事情・島根研究	8または4	犬塚優司講師
5. 大学授業実践講座	4	大橋敏博教授、豊田有恒教授、 江口真理子助教、岩本浩史講師
合計	40	

(5) 使用テキスト

各授業で使用するテキストは次の通りである。

アカデミックジャパニーズ	佐々木瑞枝他『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』(2001年、The Japan Times) 橋本俊詔『ライフサイクルの経済学』(ちくま新書) (1997年、筑摩書房)
基礎日本語補充 (会話)	山内博之『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』(2000年、アルク)
基礎日本語補充 (漢字の習得)	加藤まさを『加藤まさをの超基礎国語塾 語族で学ぶニガテ漢字 7時間』(1995年、学習研究社)
社会科学基礎知識	文英堂編集部編『シグマ現代社会の必修整理ノート』(1996年、文英堂) 政治経済教科書研究会編『政治・経済用語集 改訂版』(2000年、山川出版社)

この他に、国語辞典として、林四郎他編『例解新国語辞典』(第六版)(2002年、三省堂)を使用した。なお、日本事情・島根研究と大学授業実践講座については、特にテキストを使用せず、必要に応じて、プリントを配布した。

(6) スケジュール

この配当時間をもとに、表1のようなスケジュールを作成した。

(7) 教室

学内での授業は、本学講義研究棟の演習室13を使用することにした。この教室は、10名前後のゼミ形式の授業用で、机は口の字形式に配置してある。また、演習室13には、LAN端子があり、受講生は貸し出されたノート型パソコンをLANに繋ぐことで、インターネットの利用が可能である。また、プリンタを設置し、レジユメの作成など授業に利用できるようにした。ただし、後期入学試験期間²⁰⁾は、小講義室2を使用することにした。この教室は、60名前後の一般の授業用の教室で、机の配置は所謂「スクール」形式(最も一般的なもの)である。

(8) 担当講師間の連絡調整

担当講師は、事前の連絡調整を行い、研修における教育方針等の理解を図ることにした。また、犬塚はできる限り、毎日担当講師と接触し、その意見を聞き、日程の調整、他の担当講師や本学教職員との連絡調整を図ることにし、担当講師は、担当講師間の連絡のために、毎回授業内容、留学生の反応や授業の問題点、授業の感想を「授業連絡表」に記入することにした。

表1

月 日	曜	1時限目	2時限目	昼休み	3時限目	4時限目	備 考	
	日	9:10-10:40	10:50-12:20		13:20-14:50	15:00-16:30		
2月12日	水	開講式(9:30-10:00)、オリエンテーション、歓迎会、諸手続						
2月13日	木	プレースメント試験	プレースメント試験		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
2月14日	金	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	浜田市役所視察(午後)	
2月15日	土	休 日						留学生等を囲む会歓迎会
2月16日	日	休 日						
2月17日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
2月18日	火	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		学習相談 コンピュータ実習	大学授業実践講座(大橋)		
2月19日	水	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		会話	会話		
2月20日	木	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		漢字の習得	漢字の習得		
2月21日	金	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	松江・出雲視察(全日)	
2月22日	土	休 日						
2月23日	日	休 日						
2月24日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
2月25日	火	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		大学授業実践講座(江口)	大学授業実践講座(江口)		
2月26日	水	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		会話	会話		
2月27日	木	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		漢字の習得	漢字の習得		
2月28日	金	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	浜田市ゴミ処理施設視察(午後)	
3月1日	土	休 日						
3月2日	日	休 日						
3月3日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月4日	火	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		大学授業実践講座(岩本)	大学授業実践講座(岩本)		
3月5日	水	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月6日	木	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		漢字の習得	漢字の習得		
3月7日	金	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	津和野・益田視察(全日)	
3月8日	土	休 日						
3月9日	日	休 日						
3月10日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月11日	火	大学授業実践講座(豊田)	大学授業実践講座(豊田)		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月12日	水	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		会話	会話		
3月13日	木	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		漢字の習得	漢字の習得		
3月14日	金	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	福祉センター視察(午後)	
3月15日	土	休 日						
3月16日	日	休 日						
3月17日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		会話	会話		
3月18日	火	日本事情・島根研究	日本事情・島根研究		日本事情・島根研究	日本事情・島根研究	ふれあい総合農場しまね、第三中学校(午後)	
3月19日	水	会話	会話		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月20日	木	アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		漢字の習得	漢字の習得		
3月21日	金	休 日						
3月22日	土	休 日						
3月23日	日	休 日						
3月24日	月	社会科学基礎知識	社会科学基礎知識		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ		
3月25日	火	実力試験	実力試験		アカデミックジャパニーズ	アカデミックジャパニーズ	発表会	
3月26日	水	修了式						

2. アカデミックジャパニーズ

(1) アカデミックジャパニーズとは

留学生が日本の大学で学生生活を送るとき、出身国で学んだ日本語が通用しないことがある。これは日本で大学生として生活・研究活動をするための日本語能力²¹⁾が身につけていないために起こると考えられる。大学生活でのトラブルに適切に対処するために大学での生活と学術研究活動のスキルを習得することを旨とする科目がアカデミックジャパニーズである。

(2) 授業計画—研修科目としてのアカデミックジャパニーズ

1) 教科内容の設定

アカデミックジャパニーズの教科内容の中で、本研修では何を学ぶかは、受講生が出身国で受けた最終教育のレベルを考慮しながら、慎重に検討しなければならない。来日したばかりの受講生は、大学の講義がすべて日本語で行われるということに加え、その内容が専門化することから、講義を理解できないのではという不安を強く感じるのではないだろうか。また、大学レベルの教育機関で行われるゼミ形式の授業²²⁾は、未経験者にとって、授業そのものをイメージすることすら難しいと考えられる。こうした講義やゼミへの不安を少しでも払拭し、4月からの学術研究活動へ期待を抱けるようにするためには、あらかじめ講義やゼミを擬似的に体験し、必要な日本語のスキルを学ぶことが優先される。そこで、本研修での教科内容として、情報を収集・整理するスキル、および口頭で発表するスキルの2項目を選んだ。前者は、ノートを取りながら講義を聞く、レポートを書いたりゼミで発表したりするために文献を探すなどの場面に必要なスキルである。一方、後者は講義やゼミで発言・発表をする、質疑応答するなどの場面で用いられるスキルである。

2) 達成目標の設定

上述の二つの教科内容は、大学での学術研究活動に照準を合わせた実践的な日本語の技術である。これは、受講生が出身国で習得した日本語の知識とはまったく異なるものではなく、むしろこの知識をもとにしながら、発展的に習得するスキルである。受講生の日本語能力は同じレベルではないことから、本研修では、各自の日本語能力に応じた個別の達成目標と、入学後も継続される日本語学習を視野に入れた研修全体の達成目標とを設けることにした。個別の到達目標は、担当講師が受講生と面接を行ったうえで、各自に示す。一方、研修全体の到達目標は教科内容の習得を旨とし、情報を収集・整理するスキル習得のために、聴解・速読でキーワードを理解する、キーワードを使って要約や作文ができるようになることを目標とする。また、口頭発表のスキル習得のために、レジュメ・発表原稿の書き方の習得と、討論会やゼミで発表・質疑応答するとき用いられる表現の理解を目指す。

3) 評価の方法

本研修の評価は次のように行う。まず、研修で学ぶスキルの習熟度及び定着度は、担当講師が随時、個別に口頭でその評価を伝える。同時に、受講生ひとりひとりに適した日本語学習の方法を助言する。

研修全体の評価は、複数の視点から行われるのが望ましい。研修の最終日に開かれるゼミでの口頭発表を模した発表会²³⁾には、研修を担当する講師全員と本学教員2名が、出席する。このため、日本語の運用能力だけでなく、テキストの理解度、質問に対する回答の

適切さ、口頭発表する際の情報伝達の技術（プレゼンテーションのためのスキル）など、さまざまな角度からの評価が期待できる。この評価を参考にしながら、研修全体の成果を分析することにする²⁴⁾。

(3) 授業報告

1) 授業の進め方

本研修では、留学生が日本での大学生活を擬似体験できるように作成されたテキストとして定評のある佐々木瑞枝他『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』（2001年、The Japan Times）を使用した。研修ではこのテキストの中から教科内容に適した練習課題²⁵⁾がある課を取り上げた。

研修期間中は、ノート型のコンピュータを教室に設置し、インターネットを利用して自由に情報を収集することができるほか、メディアセンターで文献を検索したり、レファレンスサービスを利用したりすることが可能である。このような恵まれた研修の環境を活かし、4月以降、実際に受講生が行うことになる学術研究活動を想定した独自のタスクも用意することにした。

授業は研修期間を前半と後半に分ける。研修の最終日には、二つのスキルを実践的に使うタスクとして、模擬ゼミの発表会を行う。授業の内容と進め方の概要は次の通りである。

1. 研修の前半—情報を受信・整理するスキルを学ぶ
 - a. テキスト第2・3課を学ぶ。
コンピュータでキーワード検索を行う。
 - b. テキスト第5・6課を学ぶ。
討論会で発表するため、メディアセンターで情報を集める。
討論会で意見を述べる。
 - c. 金城ニュータウンを見学する。
2. 研修の後半—口頭発表をするスキルを学ぶ
 - a. テキスト第8課を学ぶ。
レジュメの書き方を学ぶ。
模擬ゼミでの発表の担当箇所を決める。
 - b. テキスト第9課を学ぶ。
発表原稿の書き方を学ぶ。
3. 模擬ゼミの口頭発表会
 - a. 事前に発表のレジュメと発表原稿を作成する。
 - b. 模擬ゼミの口頭発表、及び質疑応答を行う。

以下では、具体的な教科の内容、授業の進め方、及び受講生の反応について述べたい。

2) 研修の前半（第1週～第3週）

- a. テキスト第2・3課「講義—歴史を読み解く」を学ぶ

この課には資料を見ながら縄文時代に関する講義を聞き、キーワードを書きとるタスクや、内容の理解を深めるために講義の内容に関連した文献を速読し、情報メモを作るタスクがある。

基本的な日本語の聴解や速読の訓練に慣れている中国人の受講生には、数字や漢字の語句などのキーワードを聞き取る、あるいは書き取るタスクは比較的、やさしい作業のようだった。一方、韓国人の受講生は、音声教材を使った日本語の学習経験が浅く、キーワードの聞き取りに苦労していた。特に、漢字の能力が低い受講生は、数字を聞き取ることで精一杯だった。

キーワードがカタカナで表記する外来語²⁶⁾である場合、その聞き取りは、中国人の受講生も韓国人の受講生もあまり正確ではなかった²⁷⁾。このため、授業では、カタカナ語の基本的な語彙を増やすために、小田知子、佐々木瑞恵『アカデミック・ジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ⑦よく使うカタカナ語』（2001年、アルク）を用いた。この語彙集の巻末のカタカナ語と中国語・韓国語訳のリストを受講生に渡し、自習するように指示した。カタカナ語を正確に表記できるか、またその意味を覚えたかどうかを確認するため、小テストを行った。テストは研修中、12回実施した。どの受講生も意味を暗記してテストに臨んでいたが、音の長短や清濁を区別して覚えていないために、書き取りは正確にできない者が多かった。小テストの形式と実施方法を以下に示す。

・テストの形式

カタカナ語のテスト3 p.108

聞き取ったカタカナ語を（ ）の中に入れてください。

- ①彼女は、服と靴の（コーディネート）が上手です。
- ②まじめな少年が事件を起こす（ケース）が急増している。
- ③インターネットだと、簡単に情報を（キャッチ）することができる。
- ④登録は画面の（コマンド）に従ってください。
- ⑤赤字を（カバー）するために、土地を売った。
- ⑥あと2単位（ゲット）すれば卒業できる。
- ⑦教務課が留学生ひとりひとりを（ケア）している。
- ⑧今日の朝刊で、核兵器の問題が（クローズアップ）されている。
- ⑨割り引き航空券は、予約したら（キャンセル）できません。
- ⑩20代と50代では就労に関する意識に大きな（ギャップ）がある。

・テストの実施方法

- 1) 受講生が（ ）に適切なカタカナ語を書き入れる。
- 2) 担当講師が（ ）にカタカナ語を補充した文を2回ずつ読む。
- 3) 受講生は自分が書いた語を訂正する。

情報を収集するための手段として、コンピュータを利用したキーワード検索がある。授業ではテキストに出てきた「三内丸山遺跡・縄文時代・縄文文化」というキーワードで過去半年の新聞記事を検索した。検索の方法は、授業の担当講師ではなく、メディアセンターの職員に説明してもらった。幸い受講生はみな、コンピュータの操作そのものには長けており、日本語によるキーワード検索は簡単な作業だったようだ。しかし、検索した記事の見出しから、興味のある記事を各自が選び、記事の内容を要約するというタスクでは、受講生自らの興味によるのではなく、記事の長さが一番短いものを選んでいった。

b. テキスト第5・6課「講義—遺伝子と生命倫理」を学ぶ

この課には、遺伝学の歴史、遺伝子研究の現状を説明する講義のノートをとる、文献から情報を整理したメモを作るなどのタスクに加え、意見を述べるために必要なデータを集め、生命倫理の立場から各自が遺伝子研究のメリットとデメリットを整理する、遺伝子研究の是非について討論会で話し合うなどのタスクが用意されている。

テキストの文献には受講生が初めて目にする専門的な術語があり、即座に内容を理解することは難しいであろうことが予想された。このため、あらかじめテキストの遺伝子研究や生命倫理に関する術語のリストを渡し、各自が持参した辞書でことばの意味を調べてくるよう指示した。しかし、手持ちの辞書は語彙数が少なく、特に現代用語の記載は限られているので、語彙数の多い国語辞典や現代用語を集めた事典を数冊、教室で閲覧できるよう常時、教室に置いておいた。授業でもこれらの辞典や事典を用いて、キーワードを調べる作業を行った。日本語の説明を読むのに慣れていないせいも、分厚い国語辞典はあまり人気がなかったようだ。しかし、現代用語の事典は、一部の受講生が興味を持ったようで、休憩時間にページを繰っている姿が見られた。メディアセンターでの実習のとき、この受講生は、教室で見ていた事典が参考図書のコーナーにもあるのを見つけて、そのことを他の受講生に教えていた。この作業をとおして受講生は、日本語の意味がわからないとき、語彙によって何を引けばいいのかがわかったようだ。

遺伝子研究の是非を論じるために、自分の意見の根拠となるデータはどのようなデータかを予測し、メディアセンターで情報を収集する実習を行った。レファレンス係の職員に、参考文献の場所や探し方を教わったあと、白書や統計資料にあたり、各自のテーマに関連するデータを調べた。2時間の実習では、探そうと思っていたデータはなかなか見つけられなかったようだ。しかし、この実習のあと、研修の最終日の模擬ゼミのために、メディアセンターに何度か足を運んだ受講生がいた。この実習は情報収集のための具体的な方法を学ぶきっかけになったといえるだろう。

受講生が口頭発表のスキルを習得し日本語の発表に慣れるために、簡単な討論会を開くことにした。この討論会には、受講生のチューター²⁸⁾や先輩の留学生、竹本講師が参加した。討論会のテーマは「遺伝子研究のメリットとデメリット」とし、司会は佐藤が当たった。はじめに受講生が、各自が選んだ遺伝子研究のメリットとデメリットを説明し、その是非について自分の意見を紹介し、その意見をもとに参加者が自由に意見を述べるという形式で討論会を進めた²⁹⁾。

受講生の発表には韓国人の受講生と中国人の受講生との間に興味深い相違が見られた。それは、韓国人の受講生は討論会で何を述べるべきかが既にわかっているのに対し、中国人の受講生にはこれが理解できていない者がいるということである。討論会では、遺伝子

研究に対して賛成か反対かの立場で意見を述べることが要求されていた。韓国人の受講生は、おそらく出身国で、意見と感想を区別し、データを示し意見を述べる訓練を受けてきたものと考えられる。一方、「遺伝子研究について勉強をして、理解が深まり、とてもよかった。」という感想を原稿に書いた中国人の受講生は、討論会で求められているのは意見であって感想ではないということを知らなかったようだ。発表や文章の締めくくりに上述のような肯定的かつ私的な感想を述べることは、中国でごく普通に行われることなのではないかと推測される。このような相違は出身国で受けた教育によるのかどうかについては、さらに観察を続けたい。

c. 金城ニュータウンの住宅展示場を見学する。

この見学の目的は、研修担当の講師以外の日本語に触れる、資料や実際の日本の家屋を見ながら、説明を理解する練習を行うということにある。展示場で説明を担当する方には、事前に見学の目的を知らせ、説明する際に、日本語について特別な配慮は必要ないことも確認した。教室では、研修の担当講師はわかりやすい表現や語句を選んで話をする。このため、授業の日本語とは違う生の日本語に触れるという目的があることを断わっていた。また、「シックハウス症候群、ツーバイフォー、バリアフリー」などのカタカナ語や、「耐震構造、二世帯住宅、床暖房」など、住宅に関する専門用語は、受講生が現地で説明を聞きながらその意味を予測して理解するよう、見学前には敢えて説明しなかった。

展示場全体の地図、住宅の間取、設計依頼主の家族構成、価格など、用意された資料は数ページにわたる詳しいもので、受講生が指示されたページを探すのはかなり大変だった。まだ時間はかかるものの、ほとんどの受講生は説明の箇所を間違えることなく探しあてていた。ページ数や図表の掲載箇所などを聞き取るという作業は、説明のポイントを聞き取る作業と比べると、内容の理解を伴わない分、簡単のように思われる。しかし、実際は、かなりの練習を積み重ねなければ、外国語による指示を正確に聞き取れるようにならない。そのうえ、指示を聞き誤ったり聞き逃してしまえば、肝心の説明を理解することもおぼつかなくなってしまう。このため、授業では指示を聞き取る練習を繰り返し行った。

3) 研修の後半 (第3週～第5週)

a. テキスト第8課「演習—ライフサイクルの経済学」を学ぶ

この課にはゼミで指定された課題図書を読み、興味のあるトピックを要約して発表するタスクが入っている。課題図書は橘木俊詔『ライフサイクルの経済学』(ちくま新書)(1997年、筑摩書房)である。一連のタスクは研修の前半で学んだスキルを用いた日本語の聴解や速読の練習であるが、発表するテーマに関連する情報を収集・整理するためには、課題図書の内容を十分に理解しなければならず、高度な日本語能力が必要とされる。

課題図書には、日本人の持ち家志向は強く、郊外の庭つき一軒家が日本人の夢であるという記述が出てくる。受講生は金城ニュータウンの住宅展示場でその住宅価格に驚嘆してしまったことを思い出し、一軒家の購入がなかなか実現できないということを実感したようである。期せずして、住宅展示場の見学が課題図書の理解を助けたようである。

b. テキスト第9課「演習—戦略経営学演習」を学ぶ

第8課とこの課では、レジュメを作成するスキルを学ぶ。第8課では文字による説明が中心のレジュメだったが、第9課ではイラストや図表を多用し視覚的な効果をねらったものを作成する。このため、課題図書からより適切なキーワードを選び出す能力が要求され

る。研修の前半では、数字を聞き取るのがやっとだった受講生も、語句や要点を抜き出すことになりに慣れてきたようだ。

ゼミで口頭発表をするためには、レジュメや資料を用意する作業のほかに、発表用の原稿を書く作業がある。慣れてくれば、発表原稿は必要なくなるが、初めてゼミで発表する者には発表用の原稿は不可欠である。発表用の原稿は、口頭で発表するための文体、すなわち敬体（です・ます体）で書かなければならない。情報を収集・整理するときは、情報メモを常体（だ・である体）で書くため、このメモをもとに原稿を作成する際には、文体を敬体に変える必要が生じる。研修の前半に行った討論会では、文体について何も指示しなかったため、敬体で原稿を書いた受講生は一人しかいなかった。今回は、口頭発表で用いられる敬体で原稿を書き、文体の統一を徹底するように指示した。文章全体の文体を統一することは、文体の違いを意識したことのない受講生にとっては注意力を要する作業で、何度も書き直しをしなければならなかった。

授業では、作成した発表用の原稿を見ながら、実際に口頭で発表をする練習も行った。発表はビデオで録画した。受講生は自分の発音を聞き、発音や発声方法に問題はないかを確認した。また、発表する時の姿勢や目線など、プレゼンテーションの方法も検討した。初回の発表では、どの受講生も一気に原稿を読み上げたため、あっという間に発表が終わってしまった。発表のあと、受講生は、ビデオで自分の発表を見て、「(発表が)早口だから何を言っているか全然わからない。」と口々に言って苦笑していた。原稿のどの部分に休止を置くかを考え、原稿を読むように指示した。すると、二回目は初回の発表よりも格段に聞きやすい発表になった。日本語の発音や発声そのものに問題がある受講生も、休止を取りながらゆっくりと話すだけで、わかりやすい発表になることに気づいたようだ。このようにビデオで自分の日本語を確認することは、特に、口頭発表を行う際には効果があるといえるだろう。

4) 模擬ゼミでの口頭発表

a. 発表の準備

発表会の準備に先駆けて、初日の授業で、模擬ゼミでの口頭発表を研修の最終日に行うことを受講生に告げ、課題図書『ライフサイクルの経済学』を渡した。この段階では、ゼミでの口頭発表がどのようなものなのかを知らない受講生がおり、不安そうな表情が見て取れた。このため、発表のための準備の手順や方法などは、授業で勉強していくため心配ないことを強調しておいた。模擬ゼミで受講生が担当するのは、課題図書の第2・4章であること、担当するトピックを選ぶために、あらかじめ目を通しておくことを指示した。後半の授業では、模擬ゼミでの発表会に向けて、テキスト第8・9課のタスクと平行して、次のように準備を行った。

テキスト第8課のタスクが終わった段階で、各自が担当するトピックを課題図書から選び³⁰⁾、学んだスキルを使って、レジュメを作成する作業を宿題とし、一週間後に提出するように指示した。この一週間はテキスト第9課の発表原稿を書くタスクも宿題になっていたため、アカデミックジャパニーズだけでも宿題は相当な量に達していた。先輩の留学生は、ほとんどが一時帰国したり旅行に出かけたりしているため、宿題を手伝ってくれる人はいない。こうした状況の中で、中弛みや疲労の様子も見せず、全員が期日までに宿題を行ってきた。これは、受講生ひとりひとりが、研修の目標を達成するために、強固な意志

をもって日々の勉強に取り組んでいることを示しているといえる。

提出されたレジュメは、文法的な間違いや誤字を訂正して返却した。レジュメには、項目に通し番号を付けていない、発表日の日付がない、自分の名前を書き落としているなどの記入漏れがあった。原稿を清書するとき、自分のレジュメに書き忘れがないかをもう一度よく確認するように指示しただけで、これらの記入漏れは指摘しなかったが、発表当日のレジュメを見るとほとんど書き忘れは無くなっていた。

テキスト第9課で発表原稿を見ながら発表をするというタスクが終わったあと、今度はゼミの発表のために担当する箇所の発表原稿を書き始めた。発表原稿を作成する作業も宿題にし、随時、授業の担当講師が個別に添削して返却した。添削に際して、次の項目を重点的に訂正した。

- ・ 文法的な誤り
- ・ 誤字や脱字
- ・ 引用文以外の箇所での常体の使用
- ・ 極端な口語表現の使用

まだ語彙や表現に不自然さが残る原稿もあったが、聴衆が原稿を見ないで発表を聞いても、意味が十分に理解できる範囲であれば、敢えて訂正しなかった。この他に、キーワードを使うべきところに別の語句が使用されている箇所はできるだけキーワードを使うように指示した。また、レジュメに載せた図表について説明する時には、図表を見るように指示する文を原稿に加えた方がいいことを助言した。

受講生は授業外の時間を使って、原稿を読む練習をした。チューターに発表を聞いてもらった者もいた。どの受講生も程度の差こそあるものの発音には問題があり、早い時点でこれを矯正する必要があったにもかかわらず、発音の指導が後回しになってしまった。そこで、全員で課題図書を読むときに、受講生が自分の担当範囲を音読し、講師がキーワードを中心とした重要語句の発音を訂正し、正しい発音ができるように指導に努めた。

質疑応答をするときに用いられる表現は、テキスト第12・13課のタスクを使って学んだ。発表会では他の発表に対して、この表現を使って少なくとも一回は質問するよう指示した。

b. 模擬ゼミの発表会

研修の最終日に開かれた模擬ゼミの発表会には研修を担当した講師5名と別枝行夫教授、高橋睦子教授が参加した。発表会は次のように進んだ。司会は佐藤が受け持った。発表の前にレジュメが出席者全員に配布された。また、講師と2名の本学教員には課題図書のコピーと評価を記入するシートが渡された。発表者の持ち時間は15分で、発表者が担当箇所の要約を発表したあと、質疑応答を行った。全ての発表が終わったあと、別枝教授と研修担当の講師全員が各発表者にコメントをした³¹⁾。

評価のシートは資料1のとおりである。

資料1

演習発表の評価					
					お名前
【発表の仕方について】					
記入例：とてもよかった→4 / よかった→3 / ふつう→2 / 問題がある→1					
発表者					
分かりやすさ・速度					
分かりやすさ・話し方					
分かりやすさ・発表の構成					
時間配分					
聞き手への配慮※					
質問への答え方					
レジュメの書き方					
※聞き手を見ているか／話の節目が明確か／原稿を読み上げていないか など					
【コメント】					
各発表者へのアドバイスや発表の感想など、簡単にお書きください。					
発表者名	コメント				

(4) 授業の評価

研修の最終日に行われた模擬ゼミの発表会では、発表のあと、受講生ひとりひとりに講師と教授から建設的なコメントが出された。また、評価シートにはアドバイスや感想が記入されていた。その一部をここにまとめて紹介したい。

発表者 A

- ・発表はゆっくりと聞きやすくよく準備されていた。一方質問に答えるところになると日本語のミスが増えた。
- ・重要な語句の理解が不十分だった。
- ・相手の質問をよく聞いた上で答えるようにしましょう。

発表者 B

- ・途中から朗読になっていて残念！
- ・内容の理解が浅いように思った。
- ・論議をするのが難しいようだ。相手の質問の意図をしっかりと理解してほしい。

発表者 C

- ・資料を提示してあるのでわかりやすかったです。質問にも落ち着いて適切に答えていました。
- ・レジユメの完成度が高く、今すぐ大学のゼミに対応できるレベルである。内容をよく理解しているため、日本語表現のハンディを十分補っていた。

発表者 D

- ・話し方が速すぎてわかりにくい。
- ・発音、特にアクセントに注意が必要である。
- ・言葉の区切りが不明確であった。レジユメのまとめ方は良い。

発表者 E

- ・日本語のしゃべり方は少し下手であるが、内容を適確に理解して話をしているので、説得力がある。
- ・最初に全体の流れを述べたところもよかった。
- ・聞き手の反応をよく見て発表していて、わかりやすかったです。

発表の仕方については出席した担当講師と別枝教授に以下の6つの項目を点数化して評価シートに記入してもらった。点数は、とてもよかった：4、よかった：3、ふつう：2、問題がある：1、とした。

- ・分かりやすさ：速度・話し方・発表の構成（発表の進め方）の3項目
- ・時間配分
- ・聞き手への配慮（例：聞き手を見ているか／話の節目が明確か／原稿を読み上げているか）
- ・レジユメの書き方

点数をつける際の基準は特に設けていなかったが、採点結果を見てみると6人の点数はほぼ同じであった。この点数と上でその一部を引用したコメントとを総合すると、研修全体の評価として次の4点を指摘することができる。

第一点は、受講生が課題図書を読んで理解する能力についてである。レジユメを見るとどの受講生も課題図書からキーワードを抜き出すスキルは習得したものと思われる。ところが、キーワードが抜き出せることと課題図書の理解との間には直接的な関連性は認められなかった。もちろん内容がわからなければキーワードを選び出すことはできないことから、このスキルの習得は内容理解のための第一歩だといえる。しかし、キーワードがどのようなつながりを持ちながら論が展開しているのかという全体的な文脈を捉えることは、まだ一部の受講生にとっては困難である。それでは、日本語の基礎学力がある者の方が課題図書の全体的な論理の流れがよく理解できるかと言えば、必ずしもそうではないことが、模擬ゼミの発表から明らかになった。課題図書の内容理解の程度と日本語の基礎的な知識との間には、予想していたほどの関連性は認められず、むしろ出身国での最終教育の程度に関係があることがわかった。すなわち、母国語で学術的な文献を読んだ経験がある者ほど、日本語の課題図書もよく理解していた。担当箇所の内容の理解は、その難易度にも影響されるため、一回の発表でこのような結論を出すことは早計かもしれない。しかし、授業をとおして、同じようなことが何度か観察されたため、ゼミで使用される文献の理解に

は、日本語の能力だけでなく母国語で学術的な文献を読んだ経験が関係するものと考えられる。

第二点は発表の分かりやすさに関してである。聞きやすい発表かどうかは、受講生の日本語能力（特に漢字）や発音に左右されるものと予想された。実際に「漢字の読みまちがい、発音に問題があるため、聞きにくい所があった。」という指摘を受けたのは、漢字の知識が浅く、発音にかなり問題がある受講生だった。一方、日本語は上手に話すものの、原稿を棒読みしてしまい、発表が朗読になった者がいた。「読み方は上手であっても、内容の理解は十分とは限らない。」というコメントが示すように、発表内容の分かりやすさは、漢字の知識や発音の正確さだけによるのではなく、発表者が課題図書の内容をどのくらい理解しているかということにも関連していることが明らかになった。

第三点は、授業の達成目標の一つであるレジュメ・発表原稿を作成するスキルに関してである。レジュメや発表原稿の作成のための手順や書き方はおおむね理解されたようだ。特にレジュメの作成に関しては、かなりの成果が認められた。発表の内容を補足説明するデータを自主的に調べレジュメに図表を追加したり、論の展開をわかりやすくするためにレジュメのアウトラインを独自の構成で作成する工夫も見られた。

第四点は、質疑応答するときのスキルについてである。模擬ゼミでは、どの受講生も一度は質問していた。テキストで学んだ質問するとき用いる表現を使って質問する者もいた。質問に比べると答えるのはそう容易にはできなかったようだ。受講生の中には質問が聞き取れない者や、質問の意図や意味が理解できない者がいた。また、流暢に発表したのが、質問に答える段になると、ぞんざいなものの言い方で答えてしまう場面もあった。このように質疑応答のスキルのうち、特に応答のためのスキルはまだ十分に受講生に定着しているとはいえない。また、受講生の中には質疑応答そのものにあまり慣れていない者がいることが明らかになった。

(5) 授業の課題²⁾

授業をとおして、質疑応答のスキルのほかに、文献を読んで要約するスキルや、レポートを書くための日本語の力をつけることが急務であることを痛感した。特に、レポートのような学術的な文章の本文には私的な感想は書かないということや、事実・データと意見を区別して書く、先行研究やデータを引用する際には出典を明らかにするなどのルールは、必ず学ばなければならない項目であると言える。また、聴解の練習は研修の期間中、十分に行うことができず、依然として日本語を聞き取る力が弱い受講生がいた。入学後、生の日本語を聞く機会が増えると自然と聞き取る力がついていくと思われがちであるが、日本語に慣れてくると漫然と聞き流してしまうことも多くなる。したがって、聞きながら内容を予測したり、聞き取った内容を要約したりする練習を継続して意識的に行うことが必要だと言える。

3. アカデミックジャパニーズ以外の授業の概要

アカデミックジャパニーズ以外の授業科目については、紙幅の都合上、授業の状況を詳細に示すことができない。そこで、各授業の内容を簡単に示す。

社会科学基礎知識

- 第1講 (2月17日(月)午前) テキスト第1章「風土と生活」の1人間と文化、2世界のさまざまな文化。
- 第2講 (2月24日(月)午前) テキスト第13章日本国憲法と国民生活の40民主政治の原理、民主主義の発展、民主政治の原理、41日本国憲法の成立と特色。
- 第3講 (3月3日(月)午前) テキスト第13章日本国憲法と国民生活41日本国憲法の成立と特色、第14章現代国家と国民。
- 第4講 (3月10日(月)午前) アメリカ合衆国、中国、韓国の政治体制。資本主義経済と社会主義の歴史。
- 第5講 (3月17日(月)午前) 資本主義経済の歴史。社会主義経済体制の成立。現代の資本主義。日本経済の歩み。
- 第6講 (3月24日(月)午前) 中小企業の問題、現在の日本経済。

会話

- 第1講 (2月19日(水)午後) 第1課ユニット1。
- 第2講 (2月26日(水)午後) 第2課ユニット3。
- 第3講 (3月12日(水)午後) 第4課ユニット1。
- 第4講 (3月17日(月)午後) 第3課ユニット4。
- 第5講 (3月23日(日)午後) 第5課ユニット5。³³⁾

漢字の習得

- 第1講 (2月20日(木)午後) 小テスト。新聞記事から漢字の読み方、意味を学ぶ。テキストのまえがきと漢字習得のポイントを説明する。
- 第2講 (2月27日(木)午後) テキスト1～6。『漢字学習ステップ』1～3(受講生Eのみ)。
- 第3講 (3月6日(木)午後) テキスト7～10。新聞記事を読む。
- 第4講 (3月13日(木)午後) NEAR センターレポートを読む。テキスト pp. 38-40。
- 第5講 (3月20日(木)午後) しまねワイドニュースフェイスに本学の留学生が書いた文章を読む。テキスト pp. 50-69。

日本事情・島根研究

- 第1講 (2月14日(金)午前) 島根県の概要(人口、面積、自然環境、産業、特産物など)。日本の地方自治体。全国の都道府県。
- 第2講 (2月14日(金)午後) 浜田市役所訪問。浜田市企画財政部地域政策課地域振興係長辺寿雄氏、同課国際化推進係長川神昌暢氏から、浜田市の概要と国際交流の現状の話聞く。
- 第3講 (2月21日(金)午前・午後) 島根県庁総務課学事係、国際課訪問。松江城、小泉八雲記念館、武者屋敷、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター及び出雲大社参観。
- 第4講 (2月28日(金)午前) 日本の歴史と島根の歴史の前半を概説した。
- 第5講 (2月28日(金)午後) 浜田清掃第三処理場、島根県西部地区資源化事業協同組合を参観し、施設の説明、リサイクルの重要性について話を聞く。
- 第6講 (3月7日(金)午前・午後) 津和野町の安野光雅美術館、森鷗外旧居、森鷗外記念館、西周旧居を参観し、民俗資料館付近を散策する。益田市の高津柿本神社、万葉公園、医光寺を参加する。三隅町の中国電力三隅火

力発電所を参観する。

第7講（3月14日（金）午前）日本の歴史の後半を概説した。日本の社会福祉制度について概説した。

第8講（3月14日（金）午後）浜田市総合福祉センターを訪問し、施設の説明、浜田市社会福祉協議会の事業の説明を聞いた。

第9講（3月18日（火）午前）日本の地理。日本の位置、領土問題、日本の行政区画、山地・山脈と主要な山、平野・盆地と主要な河川。

第10稿（3月18日（火）午前）ふれあい総合農場しまね、浜田市立第三中学校を参観した³⁴⁾。

大学授業実践講座

第1講（2月18日（火）午後）大橋教授 行政の仕組み。行政の基本的な要素の一つである予算制度についての考察。

第2講（2月25日（火）午後）江口助教授 英語。本学の英語教育の特徴。英語新聞の特徴。ニュース記事の読解。ディクテーション。

第3講（3月4日（火）午後）岩本講師 日本の裁判制度。訴訟の種類。三審制と裁判制度。

第4講（3月10日（月）午後）豊田教授 地域文化と歴史。北東アジアの歴史の中での縄文・弥生時代の位置づけ。

4. 本研修の評価

一つの教育プログラムを評価するということは、一般的に言って、そのプログラムの教育目標をどれだけ達成しているかを明らかにすることであると考えられる³⁵⁾。

本研修の目的は、受講生が本学に入学期後円滑に学修、研究を進めていくことができるようにすることである。その目的を達成するために、①日本での生活に必要な日本語能力、②大学の授業を履修するために必要な日本語能力、③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識、以上の四項の能力・知識を習得しなければならない。

本研修の教育面での評価は、受講生の上記の能力・知識の習得を試験の成績により示す。また、受講生にとって本研修が入学期後の学修、研究に役に立ったと感じていたかが重要になる。そこで、受講生からのアンケート調査を行った結果を示す。さらに、担当講師からも、本研修及び担当の授業についてのアンケートにより、意見を聞いた。

(1) 評価のための資料

1) 受講生の試験結果

a. 日本語能力テストの結果

研修開始直後の2月13日と研修終了直前の3月25日に日本語能力についてのテストを実施した。テストは「日本語能力試験一級」模擬試験³⁶⁾を用いた。テストの結果は、表2の通りである。

研修終了直前の日本語能力テストの結果から、Eを除く、4名の受講生について、得点が上昇した。既に日本語能力試験一級レベルに達しているAとCについては、いずれも90%以上の成績である。Bについては、90%に迫る成績であり、当然一級レベルに達している。特に、研修開始直後のテストでは低い得点であった「聴解」の面での向上が著しい。Dについては、159点から219点へと得点が伸びている。

一方、Eについては、272点から247点へと研修開始直後の得点からやや下降している。

表 2

受講生	研修開始直後				研修修了直前			
	文字・語彙	聴解	読解・文法	合計	文字・語彙	聴解	読解・文法	合計
A	83	73	144	300	95	92	185	372
B	80	34	140	254	91	81	182	354
C	92	69	164	325	94	85	181	360
D	40	57	62	159	48	77	92	217
E	76	80	116	272	73	70	104	247
満点	100	100	200	400	100	100	200	400
平均	74.2	62.6	125.2	262.0	86.2	81.0	148.8	310.0

特に、「聴解」、「読解・文法」の面において、成績の低下が見られる。

日本語能力の向上を受講生全体から見ると、「文字・語彙」面では平均6点、「聴解」面では平均18.4点、「読解・文法」面では平均23.6点上昇している。「読解・文法」が200点満点であるのに対して、「文字・語彙」、「聴解」が100点満点であることから考えて、「聴解」の得点の上昇が著しいことが明らかである。得点の合計は、平均で262点から310点へと48点上昇している。

b. 「現代社会」の試験の結果

社会科学の基礎的な知識及び日本事情の習得を確認するために、研修開始直後と研修修了直前にテストを行った。テストは、平成15年度大学入試センター試験「現代社会」の本試験問題と追試験問題を用いた。これは、日本において高等学校を卒業した者が受験するテストであり、本試験については、受験者数、平均点、最高点、最低点、標準偏差などの情報が公開されている。

本学部に入学者が身につけているだろうと期待されている社会科学に関する基礎的な知識は、明確に規定されていない。本来、本学部教員が主体的に協議し、期待されている知識を明確にすべきである。これは、外国人留学生だけでなく、日本人学生にとっても有用な情報となるであろうが、現時点では行われていない。

そこで、本学部に入学者が身につけているだろうと期待されている社会科学に関する基礎的な知識を、高等学校における「現代社会」で教えられている社会科学的知識と仮定し、そして、留学生に求められているそのレベルを、大学入試センター試験「現代社会」で平均点をとることができるレベルと想定した。この点については、異論もあると思われるが、他に適当な資料がない以上、考え得る最も妥当な想定であろう。

ところが、上で述べたように、本試験には、受験者数213,012名、平均点59.53点、標準偏差13.69などの情報が公開されているが、追試験については、それらの情報は公開されていない。そこで、本学部1年在学のボランティア学生5名³⁷⁾に、本試験と追試験をそれぞれ受講生と同じ時期に受験させ、その成績を参考にした。ボランティア学生は、チューターに応募した者であり、本学部1年生の中からランダムに選ばれた者ではない³⁸⁾。しかし、本試験について、大学入試センターが公表している「現代社会」の平均点54.53点とボランティア学生の平均点54.8点は近似しており、追試験についてボランティア学生の平均点等を資料として用いても、想定したレベルと大きなずれはないと考えられる。

テストの結果は、表3の通りである。

表3

	受講生			日本人学生	
	研修開始直後	研修修了直前		本試験	追試験
A	17	43	F	77	64
B	34	33	G	47	51
C	23	45	H	27	27
D	9	23	I	49	52
E	18	25	J	74	80
満点	100	100	満点	100	100
平均	20.2	33.8	平均	54.8	54.8

研修開始直後のテストの成績は、各人の日本語としての「社会科学の基礎的な知識」に大きなばらつきがあることを示している。これは、出身国での学習に由来するものであると考えられる。

表3の通り、Bを除く、4名の研修修了直前の成績は、研修開始直後の成績に比べて大きく上昇している。Bについては、ほぼ横這いと言っていいだろう。全体の平均点を見ると、20.2点から33.8点へと13.6点上昇している³⁹⁾。

日本人の平均点と比較してみよう。

研修開始直後の受講生の平均点20.2点であった。この平均点は、大学入試センターが公表した実際の試験での平均点59.53点と比べて、明らかに低い⁴⁰⁾。

研修修了直前の平均点は、33.8点であった。この得点は、ボランティア学生の平均点54.8点にかなり接近している⁴¹⁾。また、研修修了直前の平均点33.8点は、日本人学生の最低点27点を上回っている。

2) 受講生に対するアンケートの結果

本研修に対する受講生の意見を聞くために、研修修了直前の3月25日と研修修了後4か月が経過した7月下旬に、アンケートを実施した。7月末は、本学の春学期の通常の授業が終了した時期に当たる。いずれのアンケートも名前を記入させ⁴²⁾、研修修了直前のアンケート⁴³⁾は49項目、研修修了4か月後に実施したアンケート⁴⁴⁾は20項目の質問を行った。

a. 修了時アンケートの結果

修了時アンケートにおいて、受講生による本研修全体については、「今回の日本語研修に参加して、よかったですか。」という質問を行い、表4のような回答を得た。

表4

大変よかった。	よかった。	普通である。	あまりよくなかった。	全くよくなかった。
5名	0名	0名	0名	0名

また、研修の実施国については、「入学前の日本語研修は、自分の国で受けるのと日本で受けるのとどちらがいいと思いますか。」という質問を行い、表5のような回答を得た。

表 5

自分の国で受ける方がよい。	どちらともいえない。	日本で受ける方がよい。
0名	0名	5名

大学授業実践講座を除く各授業科目について、「これからの学習にとって必要だと思いますか。」という質問に対しては、表 6 のような回答を得た。

表 6

	大変必要だと思った。	必要だと思った。	普通である。	あまり必要ではないと思った。	全く必要ではなかった。
アカデミックジャパニーズ	4名	1名	0名	0名	0名
社会科学基礎知識	2名	3名	0名	0名	0名
会話	3名	2名	0名	0名	0名
日本事情・島根研究(見学を除く)	4名	1名	0名	0名	0名
漢字の習得	2名	3名	0名	0名	0名

大学授業実践講座を除く各授業について、「内容はやさしかったですか。」という質問に対しては、表 7 のような回答を得た。

表 7

	大変やさしかったです。	やさしかったです。	普通である。	難しかったです。	大変難しかったです。
アカデミックジャパニーズ	0名	1名	3名	1名	0名
社会科学基礎知識	0名	0名	0名	5名	0名
会話	1名	3名	1名	0名	0名
日本事情・島根研究(見学を除く)	0名	1名	3名	1名	0名
漢字の習得	1名	1名	1名	2名	0名

アカデミックジャパニーズ及び日本事情・島根研究は、「普通である。」という回答が多い。社会科学基礎知識は、5名すべてが「難しかったです。」と回答している。会話については、「やさしかったです。」という回答が多い。漢字の習得については、回答がやや分散している。

大学授業実践講座については、担当講師ごとに、「授業の内容は難しかったですか。」という質問を行った。回答は表 8 の通りである。

表 8

	大変難しかった。	難しかった。	普通だった。	やさしかった。	大変やさしかった。
行政の仕組み (大橋先生)	1名	4名	0名	0名	0名
英語 (江口先生)	0名	3名	2名	0名	0名
日本の裁判制度 (岩本先生)	1名	1名	2名	1名	0名
日本の文化 (豊田先生)	0名	2名	3名	0名	0名

予想通り、いずれの授業も「大変難しかった。」「難しかった。」という回答が多い。

b. 4か月後アンケートの結果

さて、4か月後アンケートにおいて、「今春の日本語研修は、全体として、4月以降の授業や生活において役に立ったと思いませんか。」という質問項目を設け、本研修全体の評価を求めた。その結果、表9のような回答を得た。

表 9

大変役に立った。	役に立った。	普通である。	あまり役に立たなかった。	全く役に立たなかった。
3名	2名	0名	0名	0名

また、各授業科目について、「4月以降の授業や生活において役に立ったと思いませんか。」という質問に対する回答は、表10の通りであった。

表10

	大変役に立った。	役に立った。	普通である。	あまり役に立たなかった。	全く役に立たなかった。
アカデミック ジャパニーズ	3名	2名	0名	0名	0名
社会科学基礎知識	1名	2名	2名	0名	0名
会話	2名	3名	0名	0名	0名
日本事情・島根 研究	2名	3名	0名	0名	0名
漢字の習得	2名	2名	1名	0名	0名
大学授業実践講座	0名	2名	2名	1名	0名

3) 担当講師によるアンケートの結果

研修修了後、学外の担当講師に対して、10項目のアンケートを実施した。授業内容に関する質問⁴⁵⁾については、次のような回答を得た。

アカデミックジャパニーズ (佐藤)

大学での研究活動のために必要な日本語の能力を高めるというのが授業の目標であった。この目標に対して、授業では特に口頭発表の技術を習得してもらうことに焦点を絞り、発表資料の作成、発表原稿の書き方など指導した。ゼミでの口頭発表の模擬演習を体験することで、学生たちが少しでも不安が解消できたという点は評価できよう。しかし、授業時間が充分ではなく、文法事項の補足や発音指導など基本的な日本語能力をつけていくことはできなかった点が、課題となっている。

社会科学基礎知識 (橋ヶ迫)

「現代社会」は範囲が時間数のわりには広すぎて、漠然とした感じが拭えなかった。中心を経済と政治においたのだが、学生の常識をどの程度と見るか、判断が何であった。

日本国憲法の文章は、入国したばかりの外国人には読み難い。再考したい。

会話 (堀越)

ロール・プレイで会話を行った。留学生はロール・プレイに積極的に参加し、また大変興味を抱いた様子であった。学習面だけでなく留学生同士の交流を意識して、会話の組み合わせをその都度交替したのも効果があったと思われる。

授業程度は今少し高くても良かったのではないかというのが反省点である。彼らがロール・プレイに習熟する度合いに応じ、もっと難しいテーマを与えても充分こなせる可能性があったと思う。

漢字の習得 (竹本)

初めての経験で、読めるけど書けないという事で、少し戸惑ったけど、私も勉強し乍らやったが、充分でなかった事を反省する。

本研修の教育面における問題点についてなされた指摘をまとめると次のようになる。

- ・ 研修を担当する教員の間での連絡が充分ではなかったと思う。個別の受講生への対応や授業方針の変更など相談する場があれば良かったと思う。(佐藤)
- ・ 漢字や文法、発音などについて、個別の指導が必要である。(佐藤)
- ・ 受講生間の日本語能力の差が大きく、どのレベルに照準を合わせるか難しい。(竹本、堀越)
- ・ 経験豊富な専門の教員が担当することが望ましい。(堀越)

その他、指摘された点を次のようにまとめた。

- ・ 受講生の心のケアをする(食事を共にして、様子を見る)機会をできるだけ作ることで、授業担当の教員以外にも、学生を応援している教員がいるということが

学生たちには大きな心の支えになっていたと思う。（佐藤）

- ・コンピュータ操作の可否や漢字の知識など、来日前の早い段階で把握できれば、出身国で課題等を与えるなどして、出身国での自習を指導することが可能である。（佐藤）
- ・これまでの交流県留学生の話によると、松江での研修より良かったようだ。（橋ヶ迫）
- ・日本語を自然に話すことに慣れたことで、入学後の不安を減らすことができる利点は大きかった。（堀越）
- ・大学の所在地で研修を実施することにより、同じ大学に通う上級生、教職員との接触の機会が増えたことは、大切なことである。（堀越）

出身国での自習の指導については、検討しなければならない課題であると思う。テストやアンケートを実施し、それによって教材等を送付して自習をさせる等の方法が考えられる。

在学生や教職員、浜田市民の皆さんとの交流による心のケアに努めた。今後も継続して実施すべきことである。

(2) 各授業科目の評価

1) アカデミックジャパニーズの評価

アカデミックジャパニーズは、②大学の授業を履修するために必要な日本語能力の習得を目的としている。日本語能力の向上については、日本語能力テストの結果に表れてくるはずである。

研修修了直前の日本語能力テストの平均点は、研修開始直後の日本語能力テストの平均点より著しく高く、受講生の成績の向上が見られる。これは、受講生の日本語能力の向上に起因するものであると結論づけることができる⁴⁶⁾。このことから、全体から見て、日本語能力が向上したことは明らかである。

しかし、Eの受講生について、テストの成績が下降している。ただし、担当講師は、授業における状態からEの会話能力や読解能力が向上したことを認めている。Eの日本語能力の向上を今回の試験がなぜ反映していないのか、十分に調査する必要がある。

受講生によるアンケートの結果は、修了時、4か月後、いずれのアンケートにおいても、大変好意的である。受講生たちは、アカデミックジャパニーズが必要であり、役に立つ授業であると考えているのである。

アカデミックジャパニーズの難易度についても、「普通である。」という回答が多く、今回の受講生にとって適切な難易度であったことがわかる。

担当講師は、文法事項の補足や発音指導などが不十分であったと指摘している。アカデミックジャパニーズは、ある程度焦点を絞った授業展開がなされていたため、文法や発音に関しては、既修のものと考え、重点に置いていなかった。しかし、文法事項の補足や発音の指導を要する受講生もあり、アカデミックジャパニーズの授業とは別に、個別の指導を実施する必要があると考えた。

2) 社会科学基礎知識の評価

社会科学基礎知識は、③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・

研究する上で必要な基礎知識の習得を目的としている。これらの知識の習得については、「現代社会」の試験結果に表れてくるはずである。

研修修了直前の「現代社会」テストの平均点は、研修開始直後の「現代社会」テストの平均点より高く、受講生の成績の向上が見られる。

得点の上昇は知識の習得と一致していると必ずしも言えない。なぜなら、研修開始直後においては、問題を読解する能力が不足していたために自らの知識を表現できなかったとも考えられるからである。そこに、日本語の読解能力の向上が関与していたことは言うまでもない。したがって、得点の上昇は、知識の習得の結果とともに、日本語読解力の向上を表していると言えるだろう。日本語で問題を理解し、解答を日本語で表現する以上、日本語読解能力は、テストを受ける前提条件である。その前提条件を含めて、「知識の習得」と考えることができる。

なお、研修開始直後の問題に比べて、研修修了直前の問題の方が易しかったということも考えられる。しかし、ボランティア学生の平均点が両テストとも54.8点であり⁴⁷⁾、両テスト間の難易度の差はあまりないものと考えられる。

以上の通り、受講生が、③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識を研修以前よりも身につけたことが確認された。研修修了直前のレベルは、当初想定した「現代社会」の平均点をとるレベルに達しているとは言えない。したがって、本研修において、③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識については、必ずしも十分なものではなかったということが出来る。もちろん、研修開始直後よりも、成績は平均点にかなり接近しており、受講生のレベルは、本学の日本人学生の下位レベルに達したものと思われる。

受講生は、みな、修了時アンケートで、社会科学基礎知識の授業が「役に立ったと思った。」または「必要と思った。」と回答している。一方、4か月後アンケートでは、社会科学基礎知識の授業が4月以降の授業や生活において「大変役に立った。」または「役に立った。」という回答者があわせて3名いたが、2名は「普通である。」と回答している。また、授業について、5名全員が「難しかった。」と回答している。これらのことから、習得しなければならない知識が博く、なおかつ授業時間が少なかったために、受講生の理解が不十分なものとなり、また実際の大学の授業ではさらに多くの基礎知識が求められていたものと考えられる。

担当講師も指導する範囲が授業時間数に比べて広がったことを指摘している。社会科学基礎知識は、政治・経済中心とはいえ、高等学校の「現代社会」レベルを想定したためにかなり広い範囲の学習が必要となった。本学の学修で必要な知識について、用語解説のような授業展開の方がよかったかもしれない。ただし、それを実施するためには、本学の多くの教員の協力によって、習得すべき用語の選定が前提となる。あるいは、授業時間数をさらに増やす必要があると考える。

3) 会話の評価

会話は、①日本での生活に必要な日本語能力の補充を目的としている。これは、日本語能力テストの結果に表れてくるはずであるが、日本語能力が1級レベルのものであるため、あまり大きく関係しないであろう。

受講生は、好意的に見ている。ただし、彼らの日本語能力からすると、やさしい内容で

あったようである。

担当講師も、授業程度が今少し高いものでも良かったと感じている通り、設定した目標がやや低かったと思われる。受講生の状況に応じて、授業内容の変更も必要であったろう。また、アカデミックジャパニーズで指摘したように、文法事項の補足や発音の指導などにあてることも検討することができる。

4)漢字の習得の評価

漢字の習得は、やはり①日本での生活に必要な日本語能力の補充を目的としている。これは、日本語能力テストの結果に表れてくるはずであるが、日本語能力が1級レベルのものであるため、あまり大きく関係しないであろう。

受講生のアンケート結果は、この授業に対して好意的である。しかし、「内容はやさしかったですか。」という質問の回答がやや分散している。これは、受講生の本研修に参加する以前の漢字についての知識の差に由来するものと考えられる。

担当講師は、十分な指導ができなかったと感じている。当初、韓国出身の受講生を対象にドリル的な授業を想定していた。来日後のテストで、中国出身の受講生も、漢字の意味はわかっていても日本語の読みがわからないこと、漢字の書き取りが不十分であることなどがわかり、計画を変更してすべての受講生に実施した。そのため、授業の方針が不明確なものとなった。また、テキストは日本人の大学受験生を対象としたドリルを使用したために、意味や用法を十分に理解することなく、かなり難しい漢語を導入することとなった。吉村(1989)は、「漢字を教えるときには漢字のみを独立して教えるのではなく、語彙を導入しながらその表記として漢字を提出することが望ましい。」(p. 225)と述べており、アカデミックジャパニーズなどの授業で使用される漢語について、個別的、補足的な授業として取り扱うべきであったと考える。担当講師も早い時期からそのことに気づいており、部分的にはテキスト以外の教材を利用した授業を展開していた。できれば来日以前に受講生の漢字の習得状況を把握すること、状況に応じて、授業方針、テキストなどの変更を早急に行えるようにすることなど、今後検討を進めていかなければならない。

5)日本事情・島根研究の評価

日本事情・島根研究は、③日本の文化、社会に関する一般的な常識の習得を目的としている。これらの知識の習得については、部分的に「現代社会」の試験結果に表れてくるものと思われる。

しかし、「現代社会」の試験は、専ら社会科学基礎知識の評価のために準備されたものであり、③日本の文化、社会に関する一般的な常識と、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎について、それを区別して分析することはできないであろう。

受講生は、修了時、4か月後、いずれのアンケートにおいても、日本事情・島根研究について大変好意的である。

日本事情・島根研究の難易度についても、「普通である。」という回答が多く、今回の受講生にとって適切な難易度であったことがわかる。

担当講師である犬塚は、日本事情・島根研究について、中学校レベルの日本の地理・歴史の知識と島根県の地理・歴史を中心に授業を進めた。しかし、日本の地理・歴史については、出身国でかなり学んでいたようであり、もう少し高い目標を設定すべきであった。また、島根県の地理・歴史については、できる限り見学と連動させるように努力したが、

さらに進める必要性を感じた。

6) 大学授業実践講座の評価

大学授業実践講座は、大学での実際の授業を実感し、日本語学習の励みとなること、入学後実際の授業の難しさに驚かないようにすることなどを目的としていた。それぞれの授業について、難しかったと感じている受講生がほとんどであったが、これは初めて日本の大学の授業を受講することを考えれば当然のことである。そのため、各担当教員には、やややさしい日本語で授業をしてほしいが内容は普段の授業と同じようにしてほしいと、事前に依頼してあった。また、4か月後、「あまり役に立たなかった。」と感じた受講生が1名、「普通である。」と感じた受講生が2名いたことも、この授業科目の目的から、当然考えられることである。

(3) 本研修全体の評価

受講生は、研修修了時、全員本研修に参加して大変よかったと感じている。また、研修修了4か月後においても、本研修が4月以降の授業や生活で「大変役に立った。」と3名が、「役に立った。」と2名が感じている。受講生は、本研修を高く評価していることがわかる。特に、4か月後アンケート結果は大変重要であると考え。本研修の目的は、入学後円滑に学修、研究を進めていくことにあり、この回答は、受講生自身が4か月後円滑な学修、研究を進めている表れであると考え。また、全員が入学前の日本語研修を自国よりも日本で受けたほうがよいと考えている。

担当講師が本研修について挙げている問題点については、真摯に受け止めなければならないだろう。

担当講師間の連絡については、今後改善が必要であると思う。各担当講師の授業日が異なり、今回は、連絡表を用いたが、インターネットのメール等の利用も考えられるであろう。できうる限り、事前に十分な打ち合わせを行い、期間中も意思の疎通に努めなければならない。

個別指導については、その間指導を受けられない他の受講生に対する対応などの問題があるが、日本語能力（特に、漢字の習得や発音などの分野）や日本に関する知識などについて、大きな差がある受講生のためには、検討すべき課題である。

教員の経験・資質について、どの分野においても、経験豊富な専門の講師による指導が必要である考えるが、担当講師の確保などの理由でその実現は難しい。次善の策として、ボランティア講師を活用することは、今後も必要であろう。また、本学での研修により、ボランティア講師の日本語教育能力の向上を期待することもできるものとする。

また、研修後、各授業担当者から、本研修は、いくつかの問題点はあるものの、おおむね成果を上げたという声も聞いている。

これらの問題点の指摘は、今後の研修計画、実施に活かしていかなければならない。

おわりに

本研修の目的は、交流県留学生が本学に入学後円滑に学修、研究を進めていくことができるようにすることにあつた。そのために必要な、①日本での生活に必要な日本語能力、②大学の授業を履修するために必要な日本語能力、③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識、の習得を目指した。

①日本での生活に必要な日本語能力については、受講生が既に習得したものの補充として、会話と漢字の習得の授業を設定した。しかし、会話については、受講生の研修開始時のレベルに比べて、内容が平易なものであったという問題が生じた。また、漢字の習得については、研修開始後の受講対象の変更、テキストが受講生に合っていなかったことなどのため、指導が不十分なものとなった。一方、発音の矯正や文法事項など、研修期間中に補充が必要な項目が明らかになった。これらの問題は、研修開始時に受講生の日本語能力を十分に把握していなかったことに起因するところが多い。そのため、今後研修開始時に受講生の日本語能力を十分に把握し、基礎日本語補充として実施する内容を検討する必要があるだろう。

②大学の授業を履修するために必要な日本語能力については、試験やアンケートの結果から著しい向上が見られ、当初の目的を達成したものと考えられる。したがって、今後も本研修で実施したアカデミックジャパニーズを継続すべきである。

③日本の文化、社会に関する一般的な常識、④社会科学を学修・研究する上で必要な基礎知識については、試験やアンケートの結果から、ある程度の向上を見たことは明らかである。しかし、それは必ずしも十分なレベルとは言えない。今後、授業時間や授業内容について、検討する必要がある。

本研修の受講生は、研修修了後、2003年4月に本学総合政策学部に入學し、本稿執筆時⁴⁸⁾は、二年生に在學している。約一年半の彼らの学修状況、特に入学当初の状況を見ると、本学での学修をかなり順調に進めていることが分かる。

このように、いくつかの問題点を残しながらも、本研修は概ね当初の目的を達成したものと考え⁴⁹⁾。

本学における入学前日本語研修は、今後も継続される。研修の目的は、「本学に入學後円滑に学修、研究を進めていくことができるようにすること」である以上、本学での学修、研究に必要な日本語や知識を明確にしていかなければならない。これは、研究を進めるべき重要な課題である。

注

- 1) 以下「本学」という。
- 2) 以下「本研修」という。
- 3) これら三つの地方自治体からの留学生を「交流県留学生」という。
- 4) 島根県が定めた「島根県立大学交流県留学生受入要項」第15条に「交流県の知事等は、入学許可後入学までの期間に、交流県留学生を対象として十分な日本語教育研修を実施するものとする。」とある。なお、「交流県の知事等」とは「中華人民共和国吉林省省長、寧夏回族自治区主席及び大韓民国慶尚北道知事」（「島根県立大学交流県留学生受入要項」第6条）のことである。
- 5) なお、カリキュラムには、中国人留学生に対しては本学の中国人教員による日本語指導が、韓国人留学生に対してやはり本学の韓国人教員による日本語指導が、開學当初より予定されていた。
- 6) 松田（2002）参照。
- 7) 松田（2003）参照。

- 8) 委員長は、高橋睦子教授、委員は、高橋委員長の他に、別枝行夫交流センター長、朴容寛助教授、江口真理子助教授、犬塚優司講師、中島哲事務局次長である。
- 9) 以下「本学部」という。
- 10) 『島根県立大学総合政策学部学生便覧2003～2004』 p.7。
- 11) 植松 (1991) は、「予備教育に必要なのは、まず、日本での日常生活に必要な日本語の教育である。この日本語の教育の目的は進学校の日本人学生がもっているごく常識的な日本文化に関する知識をさづけ、そしてさらに進学校の専門的な学習に必要な予備教育をすることであろう。」(p. 271) と述べている。
- 12) 中国の六年制の外国語専門中学校である。
- 13) 中国には、四年制の大学本科に対して、三年制ないしは二年制の大学専科が存在し、ほぼ日本における短期大学に当たる。
- 14) 平成15年度日本語能力試験実施案内。
- 15) 日本語教育学会編 (1983) には、「一般に初級といわれるのは、学習の開始から約200～300時間の授業時数をかけて行われる学習段階である。…一般にいわれる“初級レベル”の学習目標に到達するには、300時間を必要とする。」(p. 633) とある。
- 16) 実際には、研修開始直後の漢字テストにより、中国人の受講生も漢字の知識、特に「読み」が不十分であることが明らかになり、全員を受講させることにした。
- 17) 堀越由美氏は本学教員の家族で、2000年度にも交流県留学生への日本語教育を担当したことがある。
- 18) 竹本喜代子氏は江津市の「江津日本語ボランティアサークルきてみんさい」で日本語教育に携わっているボランティア講師である。
- 19) 橋ヶ迫勲氏は浜田市の「マリントークの会」で日本語教育に携わっているボランティア講師であり、かつて高等学校で社会科を担当する教諭であった。
- 20) 3月11日～14日の間。
- 21) 以下「スキル」という。
- 22) 以下「ゼミ」という。
- 23) 以下「模擬ゼミの発表会」という。
- 24) 本研修で学ぶ教科の内容は、入学後も日本語の補習授業でアカデミックジャパニーズが継続して学習されることを考慮して設定されたものであるため、研修での教科内容がどの程度、受講生に定着したかという評価は、あくまでも一時的な評価にすぎないことを明記しておきたい。
- 25) 以下「タスク」という。
- 26) 以下「カタカナ語」という。
- 27) カタカナ語の意味を推測する場合は、中国人の受講生と韓国人の受講生とでは顕著な違いが見られた。中国人の受講生は前後の文脈から意味を考えていたのに対し、韓国人の受講生は文脈からではなく、発音から原語にさかのぼって意味を推測するため、韓国人の方が高い確率で意味を正確に予測していた。これは、母国語に原語と類似の発音をする外来語がどれだけ入っているかという違いによるものであろう。
- 28) 本学では、本学在学の学生をチューターに任命している。チューターは、外国人留学生の学習・研究効果の向上及び環境への適応を図るために、留学生に対して、学習上の援助及び生活上の指導を行う。
- 29) 受講生が選んだテーマは以下のとおりである (受講生が書いたままを引用)。
 - ・自分の遺伝子を導入した移植用の臓器を作る

- ・ 遺伝子操作によって人工臓器移植
 - ・ パーフェクトベイビーからの考え（2名が同じテーマ）
 - ・ 寿命を大きく伸ばす
- 30) 発表者の担当箇所は以下のとおりである。
「第2章 就労と報酬」より 1.人はなぜ働くのか、2.雇用者か自営業か、公務か民間か、3. 労働への給付—賃金と非賃金支払い、4.女子の労働力参加
「第4章 結婚と家族」より 2.未婚率の上昇と結婚の崩壊
- 31) 高橋教授は都合により途中で退席した。
- 32) 入学後、一年間の補習授業（佐藤担当の授業）で受講生は論文作成のためのスキルを学んだ。また、ラジオのニュース番組を使って聴読解の練習も行った。教科内容の概要を以下に示す。
- ・ レポートや論文などの学術的な文章を書く時に用いられる表現を学ぶ。
 - ・ 自分の意見や考えとその根拠となる事実やデータとを区別して述べる練習を行う。
 - ・ 資料やデータを引用、解説する練習を行う。
 - ・ レポートや論文の構成（アウトライン）の作り方を練習する。
 - ・ NHK ラジオ第一放送「列島リレーニュース」を聞き要約文を書く。
- 33) 計画では、3月19日午前に実施する予定であったが、担当講師の体調不良のため、この日に、会議室Bで実施された。会議室Bは、10名前後の会議を行うための部屋であり、受講生は、中央の大きな机を囲んで着席して、受講した。
- 34) 当日、犬塚に代わり、本学教務課学生係の岩本和輝主任が引率した。
- 35) 本研修全体の評価においては、浜田で実施された意味を含めて、生活面への配慮や交流活動についても重要な問題であるが、紙幅の都合により省略する。また、コストの問題も重要ではあるが、本稿においては取り扱わないことにする。
- 36) 石崎、古市、井江（1999）の模擬テストを利用した。
- 37) 当初7名の学生を予定してしたが、そのうち2名は第一回のテスト（本試験分）に欠席したので、対象から外した。
- 38) チューターを希望する学生とそうでない学生の現代社会の試験の成績に有意な差異があるとは、常識的には考えにくい。ただし、学内のイベントなどに積極的に参加する学生とそうでない学生の成績に有意な差異がある可能性はありそうである。
- 39) 対となる要素のt検定の結果、「研修修了直前の平均点は、研修開始直後の平均点よりも高くはない。」という仮説を5%水準の信頼度で棄却できることがわかった。したがって、研修修了直前の平均点は、研修開始直後の平均点から上昇したことが説明できる。なお、t検定などの統計的手法については、国沢（1966）を参考にし、実際の計算には、Microsoft社製Excel 2000付属の分析ツールを用いた。
- 40) 大学入試センター試験「現代社会」を受験した者の得点分布が正規分布をしていると仮定すると、「実際の試験の平均点は、受講生の平均点と同じである。」という仮説は、5%水準の信頼度で棄却することができる。なお、ボランティア学生の平均点54.8点では、同様の仮説を5%水準の信頼度で棄却することはできなかった。また、受講生の平均点とボランティア学生の平均点を調べてみた。まず、両者の分散をF検定で確かめたところ、両者の分散が均しいという仮説を5%水準の信頼度で棄却することができなかった。したがって、t検定（等分散のt検定）とWelchの検定（分散の異なるt検定）を行った。その結果、いずれの検定においても、「受講生の平均点はボランティア学生の平均点と同じである。」という仮説は5%水準の信頼度で棄却することができた。したがって、両者の平均点が異なっていることが確かめられた。

- 41) t検定、Welch の検定のいずれの結果からも、「受講生の平均点はボランティア学生の平均点と同じである。」という仮説を5%水準の信頼度で棄却することはできなかった。
- 42) この種のアンケートの場合、無記名の方が受講生の意見を正確に把握することができると思うが、人数が少なく、自由記入の項目もあり、記入者を特定することが可能となるため、あまり意味がないと考えた。また、問題点を指摘した受講生に対して、更に事情を聞く必要があるため、記名させることにした。
- 43) 以下「修了時アンケート」という。
- 44) 以下「4か月後アンケート」という。
- 45) 「ご担当いただいた授業の内容について、ご意見をお書きください。」という質問を行った。
- 46) 本研究においては、統制群をおいていない。セリガー、ショハミー（2001）は、このような実験デザインを「反復測定」デザインと呼び、「(前後の測定)の差異が、被験者が教室外の経験をしたり、言語素材にふれたりして得た結果であったかどうかは、知る術がない。」(pp. 153-54)と指摘している。しかし、統制群を用意して、実験を実施できる可能性はほとんどない。統制群となる被験者を見つけることは大変困難であり、交流県留学生を二つのグループに分け、一グループのみ研修を行い、他のグループに研修の機会を与えないということは、大きな問題である。また、日本における「教室外での経験」も、本研修に参加することによって受講生に与えられたものであり、大きな意味で研修に含まれるものと考えることができる。
- 47) 対となる要素のt検定の結果、「両テストの平均点は均しい。」という仮説を5%水準の信頼度で棄却することは、当然できなかった。
- 48) 2004年10月。
- 49) 本稿の筆者は、いずれも本研修を計画し、実施した担当者である。したがって、より正確の評価を行うためには、本研修の計画、実施段階で関与しなかった第三者による評価が不可欠であると考えられる。そのため、研修の計画段階からできる限り記録を残し、第三者の評価が可能であるように努めたが、残念ながら、実施することができなかった。今後、入学前研修の実施に際しては、第三者評価を考慮に入れなければならない。また、本研修の成果を明確にするためには、さらに生活指導、交流活動、心のケアやコストの点などを含めた総合的な評価も実施しなければならない。

引用・参考文献

- Herbert W. Seliger, Elana Shohamy (1989) *Second Language Research Methods* (Oxford University Press).
- ハーバート・W・セリガー、イラナ・ショハミー／訳：土屋武久、森田彰、星美季、狩野紀子（2001）『外国語教育リサーチマニュアル』（大修館書店）
- 北條淳子（1989）「中・上級の指導上の問題」（寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法（上）』（明治書院）pp. 238-267）
- 石崎晶子、古市由美子、井江ミサ子（1999）『合格できる！ 1級日本語能力試験対策 模擬テスト2回分つき』（アルク）
- 海保博之、柏崎秀子編（2002）『日本語教育のための心理学』（新曜社）
- 国立国語研究所編（1997）『中・上級の教授法』（大蔵省印刷局）
- 国沢清典編（1966）『確率統計演習2 統計』（培風館）
- 松田みゆき（2002）「島根県立大学交流県留学生への日本語教育の必要性和今後の課題－「島根県立大学交流県留学生松江日本語研修」報告－」（島根県立大学総合政策学会編『総合政策論

叢』Vol. 3, pp. 93-120)

松田みゆき（2003）「島根県立大学交流県留学生への“橋渡し教育”の試みー「第2回島根県立大学交流県留学生松江日本語研修」報告ー」（島根県立大学メディアセンター編『メディアセンター年報』Vol. 3, pp. 64-88）

日本語教育学会編（1983）『日本語教育事典』（大修館書店）

奥田邦男（1991）「大学の日本語教育の現状と問題点」（上野田鶴子編『講座日本語と日本語教育 第16巻 日本語教育の現状と課題』（1991年、明治書院） pp. 217-251）

田中望（1988）『日本語教育の方法』（大修館書店）

田中望（1989）「コース・デザイン」（寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法（上）』（明治書院） pp. 93-110）

植松清（1991）「大学・高等専門学校入学志望者のための予備教育」（上野田鶴子編『講座日本語と日本語教育 第16巻 日本語教育の現状と課題』（1991年、明治書院） pp. 271-297）

吉村弓子（1989）「漢字の指導」（寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法（上）』（明治書院） pp. 219-237）

謝辞：本研修の実施に当たっては、参観活動、生活支援や交流活動等において、学外の多くの方々の協力を得た。この場を借りて感謝の意を表す。熱心にご指導いただいた竹本喜代子先生、橋ヶ迫劭先生、堀越由美先生に、感謝の意を表す。また、本研修に協力いただいた本学教員の皆さん、本学事務局職員の皆さんに、感謝の意を表す。特に教務課学生係田邊和佳子主幹、岩本和輝主任は、計画、実施段階において、多大なる尽力をいただいた。彼らの力がなければ、本研修は成功しなかったと言っても過言ではない。

最後に、本稿をご査読いただき、貴重なご指摘、ご意見をお寄せいただいた本学教員の皆さんに、心からの感謝の意を表す。

キーワード：日本語教育 予備教育 アカデミックジャパニーズ 評価

(INUZUKA Yuji and SATO Rieko)

A Study of the Preparatory Japanese Language Education Program in the University of Shimane :

A Report and Evaluation of the Japanese Language Training
for the Friendship Foreign Students in the University of Shimane 2003

INUZUKA Yuji

SATO Rieko

This study is a description and evaluation of “the Japanese Language Training Program for Friendship Foreign Students at the University of Shimane 2003” from February 12 to March 26, 2003.

The purpose of the program was to help Friendship Foreign Students develop a) Japanese abilities needed in life, b) Japanese abilities in study and research, and acquire c) knowledge of Japanese culture and society, d) a basic background in the social science. Students participated in three courses : Academic Japanese, basic Japanese supplement, and basic social science knowledge. A total of five student participants sat through 112 class sessions, each one lasting 90 minutes.

Two tests were given for purposes of evaluating the program : a pre-test and a test after the training was completed. In addition, students and teachers were asked to fill out a questionnaire.

The results indicate a remarkable increase students' Japanese abilities and skills, and substantial gains in terms of knowledge of Japanese culture and society and basic social science knowledge. However, similar increases were not noted for matriculated Japanese students at the University of Shimane. Although further study is warranted, it seems clear that the program did lead to improvements language training.